

## さよなら。

岬の小さなカフェを訪ねるのは二度目だった。最初は作家と編集者、カメラマンと能登の風土を体感する男ばかりの車の旅であった。貴重な漆塗りや建物をたくさん見せてもらったが、私は夏の陽で艶やかに光る黒い屋根瓦に魅了されていた。泊まった宿の主が「近くに珈琲の飲める店がある」と、そのカフェを教えてくださいました。やはり自分たちは珈琲が必要な人間に見えるのかと内心苦笑した。女主人の祖父が使っていた船蔵を改装した店で淹れた珈琲を、日本海を望む外の原っぱで飲んだ。夏風が気持ちいい。「冬はこの風が吹雪いてほとんど営業できなくなるので、地元の人みんなお店をやるのは無茶だって言います」と女主人は言った。

二年後、私はまた能登を訪ねることになった。念願の黒い屋根瓦に専念できる取材であった。あのカフェが遠くないことはわかっていたが、きつとあの店は閉じたのだらうと思っていた。不便さ以上に、あの女主人に商売は馴染まない気がしていた。確認のつもりで岬に行くと言感外れて、カフェは遠方から来たカッブルで盛況、女主人は奥で忙しそうだった。そんな景

色を見ると、すうっと流してしまふところが私にはあって、頼んでしまった珈琲を急いで飲み干して勘定をした。釣り銭を渡す若い男の店員は「あのう、雑誌かなにかの取材の方ですか？うちの主人は店が忙しくなるんでこれ以上取材はお受けしないと思いますよ」と言った。誤解をそのままにして私が「君はいつから働いているの？」と聞くと「ネットでこの店見つけて、去年、彼女と来たら気に入っちゃって。すぐ二人で引越して来て、今は働かせてもらってます」と、夢見た場所にいられることに、にっこりした。

車での移動を再開すると、赤信号でバックミラーに私たちを追いかけてくる車が映った。振る手の感じであの店の女主人だとわかった。「す、すみません。きつとあの子が失礼な言い方をしたと思うんでお詫びにきました」。「ご挨拶しようと思っただけで慌ただしくて……。すぐにお帰りになったと聞いて……」と言った。額から汗が一雫こぼれ落ちた。私は恐縮したが彼女のこれからの旅を思い「わざわざありがとうございませう。さよなら」というのが精一杯であった。

本を作る仕事をしながらいつも、あの若者のように、何か守りたい、という気持ちを羨ましく感じる反面、私は遠いところに来てしまった気がする。固まった心はなるべく自由にしたいと思っっている。一冊の本を読んだ後も、本を読む前と同じ生活ができるようでは、少しばかり淋しいから。



1963年、福岡県生まれ。装幀家、アートディレクター。新潮社装幀室を経て独立。これまで、沢木耕太郎、宮部みゆき、宮本輝らの書籍や、「百年文庫」(ポプラ社)、「エクス・リブリス」(白水社)、ロアルド・ダールなどのシリーズを手がける。最近の装幀に、平田俊子「スバラしきバス」(幻戯書房)、沢木耕太郎「あなたがいる場所」(新潮社)など。平成23年度版小学校「国語」教科書のアートディレクションを担当。